

英語とフランス語 ——その意外に近い関係



金山富美

「フランス人は英語で話しかけると、わざと答えてくれないらしいですね」

学生からよくこんな質問を受けるが、そんなことはない。外国人観光客に英語で道を聞かれた場合、日本人とフランス人のどちらがきちんと対応するのかといえば、それはきっと後者だろう。少なくとも私は、フランス人が困りきって尋ねてきた相手を見捨てるような場面に、一度も出会ったことがない。若者がアメリカの文化に惹かれるのは日本の場合と大差ないし、最近の50～60代のフランス人は自国語の伝統を尊重しつつも英語の必要性をよく理解している。10年前に開通したユーロトンネルにより、フランスとイギリスとはまるで陸続きになったかのようで、イギリスで職を求めるフランス人も年々増えてきている。昨年ロンドンに行ったおり、「少しお金をいただけないかしら」とフランス語訛りの英語で呼び止められたのには、少々面喰らってしまったが…。

ところで、イギリスとフランスはまったく別々の国家ととらえられているが、歴史的にはイギリス王家にはフランス人の血が入っており、英仏海峡は家と家との境界線のようなものだった。言語に関しても、ゲルマン語に属す英語は本来なら兄弟分のドイツ語や北欧諸語に似ているはずだが、実質的にはラテン語から生まれたフランス語の方にずっと近く、現代英語の語彙の半分以上はフランス語、またはその母であるラテン語からもたらされたものである。その理由が、11世紀のノルマン・コンクエストであったことはいままでもない。

「イングランド王ウィリアムというけれど、彼って本当はノルマンディー公ギヨームというフランス人な

のよ」

「[骨折って働く travailler] というフランス語が[苦労して旅する]という意味でイギリスに伝わって[旅行 travel] ができた。フランス語の[一日 journée] も英語では[一日の旅]という意味から[旅 journey] となった。イギリス人は旅好きなの？」

「[議会 Parliament] がワイワイやるのはフランス語の[話す parler] が語源だから」etc.

学生は、こんな英語史ともフランス語史とも呼べる話が大好きだ。さらに、英語仏語両方を話すケベック在住の友人やフランスの若者が使うフ랑グレ*、大学時代にフランス文学を専攻したアメリカ人の友人が「エレガントな自分(?)」に酔いしれながら口にするフラングリッシュ**の話をしてやると、学生はそれを「文化理解のための語学」として歓迎してくれる。

実際、言語はたえず変化を続けるもので、英仏語学史は今なお刻々と新たな展開を見せている。イギリスはまだ踏み切っていないものの、統一通貨ユーロを契機としてヨーロッパの経済、文化活動が国境を超えて動き、さらに世界へと広く波及していく時代ならなおさらであろう。文化学習は教師自身にとっても楽しく興味深いものだが、それは語学を「美味しく食べさせる」ためのスパイスでもあり、未来に生きる学生にとっては有意義な知識ではないかと思っている。

*フ랑グレ Franglais : 英語的なフランス語のこと

**フラングリッシュ Franglais : 意識して英語にフランス語の語彙を混ぜたり、英語をフランス語的に表現すること。Ex. 成功・満足を表して Voilà! という(『ジーニアス英和辞典』には英語として記載あり)

(かなやま ふみ・島根大学法文学部助教授)